



Title	頓挫した「プロレタリアン・ミステリー」一文戦派作家と探偵小説の接点をめぐってー
Author(s)	Leckie, William Richard
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92014
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ LECKIE RICHARD WILLIAM ）	
論文題名	頓挫した「プロレタリアン・ミステリー」 ——文戦派作家と探偵小説の接点をめぐって——
論文内容の要旨 『日本探偵小説傑作集』（春秋社、一九三五年）の序文「日本の探偵小説」では、江戸川乱歩は羽志主水、葉山嘉樹、前田河広一郎、岩藤雪夫、林房雄、平林たい子、佐々木俊郎の七作家による十二作を「社会的探偵小説」として紹介している。そのほとんどは、娯楽雑誌『新青年』に発表された、『文芸戦線』同人のプロレタリア作家によるものである。この作品群は、「プロレタリア文学のなかでくりかえし顕在化しては運動を混乱させ」た（池田浩士「転向と探偵小説—平林初之輔没後五十年によせて」（『思想』一九八一年十一月））芸術大衆化論争の産物であると共に、「創作探偵小説といふものが発生したからには、文壇のヴェテランを動かして一層すぐれた作品を得よう」とした「『新青年』の純文学作家への働きかけ」（江戸川乱歩「続・一般文壇と探偵小説」（『宝石』一九四九年七月））の一環でもあるため、一九三〇年前後に話題になった「プロレタリア大衆小説」とは似て非なるものである。 本研究は、「プロレタリア文学」「探偵小説」の従来の枠組みや線引きに囚われない視座から、これらの「プロレタリアン・ミステリー」を捉え直して考察する試みである。プロレタリアン・ミステリーは、以下の理由から大きな研究価値があると筆者は考える。 一、『新青年』が『文芸戦線』より四倍近くの発行部数を誇っていたため、これらの作品は多くの読者の目に触れ、各作家の受容史において何等かの意義を持つはずである。 二、文戦派作家にとって、『新青年』のような娯楽雑誌は、プロ文壇の制約から逃れられる憩いの場で、『文芸戦線』では書けないような題材や内容の作品を発表できるメディアであったと考えられる。従って、従来のプロレタリア文学の枠に囚われない各作家の魅力と面白味をこの作品群に発見することができる。 三、従来のプロレタリア文学研究は、イデオロギー面を中心としたものやプロレタリア文化運動に限定したものが多。プロレタリアン・ミステリーを取り上げることにより、プロレタリア文学を当時の新興文学や出版メディア等、より巨視的な文脈の中で捉え直すことができる。 全三部六章による本論の梗概は、以下の通りである。 まず序論では、プロレタリアン・ミステリーが戦後に発掘された経緯と、先行研究の流れを整理した。次に、この作品群の時代背景として、ほぼ同時期に勃興したプロレタリア文学と大衆文学の関係性、芸術大衆化論争の展開とプロレタリア大衆小説の誕生、そしてプロレタリア文壇と探偵小説、とりわけ文戦派作家と『新青年』の関わりを概観した。 第一部「理論から実践へ——論争、批評、創作」では、ミステリー創作のみならず、評論においても探偵小説の在り方を説いた平林初之輔と前田河広一郎を取り上げた。第一章「平林初之輔の探偵小説と〈社会性〉——『犠牲者』を中心に」では、平林の『文芸戦線』脱退前に書かれた「犠牲者」（『新青年』一九二六年五月）が持つ社会性を考察することにより、平林の探偵小説は「思想性を帯びていなかった」「プロレタリア文学の匂いはほとんどなかった」という従来の見解に異議を唱えた。アナトール・フランスの諷刺小説「クランクビーユ」の物語に乱歩の「一枚の切符」のどんでん返しを付け加えたことにより、社会の支配構造と裁判制度を批判するプロレタリア探偵小説「犠牲者」が生まれた経緯を明らかにし、〈プロレタリア文壇の平林〉と〈探偵小説壇の平林〉を有機的に結びつけた存在として捉え直した。 第二章「前田河広一郎『労働者ジョウ・オ・ブラインの死』の成立過程—— 犯罪実話から諷刺ミステリーへ」では、探偵小説の権威性をめぐって乱歩と論争を起こした一九二四年から、プロレタリアン・ミステリー「労働者ジョウ・オ・ブラインの死」を『新青年』（十二月）に発表した一九三一年までの七年間にわたる動向を見ることにより、平林に引けを取らない情熱を持って模索され続けた前田河の探偵小説への取り組みに光を当てた。「労働者ジョウ・オ・ブラインの死」には木村毅が提唱した実話文学の影響が見られること、そして前田河がアナトール・フランスの「ピ	

ュトア」をモデルにしてアメリカの赤狩りを諷刺したことを明らかにした。また、アナトール・フランスの諷刺小説を模範とした平林初之輔と前田河の創作アプローチに明確な共通点が見られることと、前田河の探偵小説論が平林の評論と並んでプロレタリアン・ミステリーの歴史において重要な役割を果たしていることを主張した。

第二部「〈変格〉と〈変態〉の一九二七（昭和二）年」では、プロレタリア作家たちが『文芸市場』をはじめとする梅原北明の出版物と密接な関わりを持ち、世間の「変態心理」と「変態性欲」に対する関心によって『新青年』の誌面で「変格もの」が流行した一九二七年に発表された、葉山嘉樹と村山知義の作品を分析した。第三章「葉山嘉樹『死屍を食ふ男』論——豊津、怪談、乱歩」では、本作の原話である学校怪談、葉山文学では珍しい故郷描写、そして乱歩作品の影響という三つの観点から「死屍を食ふ男」（『新青年』四月）を考察した。作品の舞台が豊津であることは葉山研究で既に指摘されているが、現地調査により、本作に出てくるほぼ全場所の特定に成功した。また、本作の物語構成や、登場人物「安岡」と「深谷」の関係などに乱歩の「闇に蠢く」の濃厚な影響が見られると主張した。

第四章「村山知義『巴里』論—アヴァンギャルドと『変態性欲』」では、本作の成立に不可欠であったと思われる村山自身の渡欧体験と、帰国後の地下出版との関わりを紹介した上で、「巴里」（『新青年』同号）の同性愛のモチーフに見られる〈変態性欲〉の要素と、エッフェル塔をはじめとするパリ描写に見られる、村山がアヴァンギャルド時代から標榜した〈構成主義〉の要素を考察した。村山が八代清夫という変名で、男色を描いたフランシス・カルコの小説「ジェシュ・ラ・カイユ」を翻訳していた可能性と、「巴里」の一部が同作へのオマージュになっていることを指摘した。また、装飾を排した「構成的」な鉄塔（エッフェル塔）が、装飾的で「構図的」な美術からの脱出を意味すると同時に、帝国やブルジョアジーを倒す「革命的」な意味をも帯びていることを明らかにした。

第三部「〈越境〉の培養土—大衆文化メディアと文壇内の関ぎ合い」では、文学史にほとんど忘れられ、現代において作家像が確立されていない羽志主水と岩藤雪夫の越境的な作品を考察することにより、プロレタリアン・ミステリーを有名作家の「余技」や「異色作」と見る従来の評価と距離を置き、これらの作品を生んだ文壇状況に光を当てた。第五章「現実に見立てた労働劇—羽志主水『監獄部屋』の〈時事性〉をめぐって」では、時事問題や話題の事物を作品に取り入れる探偵小説作家・羽志主水の〈時事性〉と、探偵小説壇に高く評価された「監獄部屋」（『新青年』一九二六年三月）の〈社会性〉を紹介した。一方、ゴゴリの「検察官」のオチを狙った〈芝居性〉、探偵小説に自己言及する〈虚構性〉、日本の近代化の遅れを揶揄する〈諷刺性〉など、プロレタリア作家の沼田流人がタコ部屋を描いた「血の呻き」の社会主義リアリズムとは違った要素が本作に多く含まれていることを指摘した。「監獄部屋」は、タコ部屋の表象が『新青年』のような大衆文化メディアによって消費されていく早い段階の作品で、大衆化の要素が見受けられるものの、タコ部屋制度を告発するプロレタリア小説と「同時代の社会的コンテクスト」を共有しているという結論に達した。

第六章「岩藤雪夫の挑戦—『人を喰った機関車』と『赤い灯』を中心に」では、岩藤雪夫の越境的な試みとそれを可能にした当時の文壇の混沌を考察した。芸術大衆化論争で浮き彫りになった〈階級性〉と〈大衆性〉の関ぎ合いを視野に収めた「人を喰った機関車」（『新青年』一九三一年十月）では、岩藤は「近代化」と「非人間化」という〈機械〉の両義性を活かし、自らのプロレタリア小説「十二月の記憶」（『改造』一九三〇年十二月）に探偵小説や映画といった大衆文化の要素を取り入れることにより、掲載誌『新青年』に相応しい作品に書き換えた。一方、「赤い灯」（『創作月刊』一九二九年一月）は形式主義文学論争で浮き彫りになった〈内容〉（思想）と〈形式〉（表現法）の関ぎ合いを視野に入れた作品である。岩藤は動物の目から人間界を見た横光利一の小説や空から地上を見下ろした飛行文学など、〈他者の視点〉から書かれた同時代作品に着想を得て、それらの斬新な表現法に階級意識を入れ込むことにより、横光にも絶賛された独自の作風に仕上げた。

終章では、乱歩が「日本の探偵小説」の中でプロレタリア探偵小説を失敗、あるいは挫折したものとして論じていることを受け、その理由について考察した。大衆文学の「大衆性」を肯定しながらその「娯楽性」や「通俗性」を否定したプロレタリア文壇の矛盾した態度、芸術と娯楽の間に位置する西欧の「ミドルブラウ」のような概念の不在、掲載メディアの性格と読者のニーズの把握不足、そして探偵小説の「権力性」を批判しながらそのジャンルを十分に相対化できなかったことを、失敗の原因として挙げた。一方、プロレタリアン・ミステリーを発表当時の大衆化と大衆文化メディア、論争と関ぎ合い、そしてそれによって起こった文壇の混沌とジャンルの混淆の中で捉えた研究アプローチは、当時の新興文学の理解を深める鍵となり、従来の近代文学史の定説における分類枠組みの見直しを促す可能性さえ秘めていると主張した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (レ ッ キ ー ・ リ チ ャ ー ド ・ ウ ィ リ ア ム)				
	(職) 氏 名			
最終試験担当者	主 査	大阪大学	教授	斎藤 理生
	副 査	大阪大学	教授	渡邊 英理
	副 査	大阪大学	教授	滝川 幸司
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 頓挫した「プロレタリアン・ミステリー」

— 一文戦派作家と探偵小説の接点をめぐって —

学位申請者 レッキー・リチャード・ウィリアム

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 斎藤 理生

副査 大阪大学教授 渡邊 英理

副査 大阪大学教授 滝川 幸司

【論文内容の要旨】

本論文は、一九二〇年代から三〇年代にかけて、プロレタリア文学雑誌『文芸戦線』の同人たちが、娯楽雑誌『新青年』に発表した作品群について考察したものである。各章において、それぞれの作家の背景や作品成立の経緯を踏まえ、個別の小説を読み解くことを通じて、「プロレタリア文学」と「探偵小説」とをめぐる従来の枠組みにとらわれない考察を行い、〈大衆〉や〈社会〉を意識した、当時の新たな文学が持っていた可能性と限界を浮き彫りにしている。

約二〇万字の分量を持つ本論は、三つの部に分けられた六つの章を中核とし、序章と終章とを付すことで構成されている。

序章では、プロレタリア文学と探偵小説について、同時代の状況と研究の現在を確認した上で、問題の所在を明らかにしている。

第一部「理論から実践へ—論争、批評、創作—」では、ミステリーを創作するのみならず、評論においても探偵小説のあり方を説いた平林初之輔と前田河広一郎を取りあげている。

第一章「平林初之輔の探偵小説と〈社会性〉—「犠牲者」を中心に—」では、平林が『文芸戦線』脱退前に『新青年』に発表した小説「犠牲者」を取りあげ、アナトール・フランスや江戸川乱歩の作品からの摂取と、作中に内包された左翼的社会性を明らかにすることで、従来の研究で別々に捉えられてきた〈プロレタリア文壇の平林〉と〈探偵小説界の平林〉とが不可分であると主張している。

第二章「前田河広一郎「労働者ジョウ・オ・ブラインの死」の成立過程—犯罪実話から諷刺ミステリーへ—」では、当時の探偵小説を厳しく批判しながら、実は深い関心も寄せていた前田河による作品「労働者ジョウ・オ・ブラインの死」を、当時流行していた実話文学の影響や、アナトール・フランス作品からの摂取を踏まえて分析し、アメリカの赤狩りが諷刺されていることを読み解いている。

第二部「〈変格〉と〈変態〉の一九二七（昭和二）年」では、大正期以来流行していた「変態心理」「変態性欲」がプロレタリア文壇に及ぼした影響を、葉山嘉樹と村山知義という二人の作家が同年同月に『新青年』に発表した作品を通じて考察している。

第三章「葉山嘉樹「死屍を食ふ男」論—豊津、怪談、乱歩—」では、葉山の「死屍を食ふ男」という猟奇的な題

材を扱った作品を、元になった怪談、故郷の描写、摂取した江戸川乱歩作品などを踏まえて多角的に分析し、その文学史的な意義を再検討している。

第四章「村山知義「巴里」論—アヴァンギャルドと「変態性欲」—」では、作家の渡欧体験や地下出版との関わりを踏まえて、作品「巴里」を同性愛のモチーフと構成主義からの影響に着目して分析している。

第三部「〈越境〉の培養土—大衆文化メディアと文壇内の闘い—」では、羽志主水と岩藤雪夫による、現在では知られていないものの、かつては高く評価された作品を、当時の文壇状況に光を当てて分析している。

第五章「現実に見立てた労働劇—羽志主水「監獄部屋」の〈時事性〉をめぐって—」では、羽志の「監獄部屋」が時事問題や話題の事物、特に中心となるタコ部屋労働の描き方、取り入れ方に着目し、ゴゴリ「検察官」の摂取なども踏まえつつ、同時代作品と比較しながら考察している。

第六章「岩藤雪夫の挑戦—「人を喰った機関車」と「赤い灯」を中心に—」では、岩藤の小説「人を喰った機関車」と「赤い灯」について、前者は探偵小説や映画のような大衆文化の要素を取り入れていることに、後者は新感覚派的な表現技法に着目して、かつて小林多喜二と並称された作家による、狭義のプロレタリア文学作品に留まらぬ試みを再検討している。

終章では、上記の内容をまとめつつ、プロレタリアン・ミステリーが行き詰まらざるを得なかった原因と、今後の研究課題を明らかにしている。

【論文審査の結果の要旨】

プロレタリア文学が日本の文壇を席卷していた一九二〇年代後半から三〇年代前半は、探偵小説が勃興し、流行した時期でもあった。しかし従来、プロレタリア文学は既成作家や新感覚派との対比において考察され、探偵小説は純文学外の問題とされることが一般的であった。そのような研究史に対して本論は、複数のプロレタリア文学の代表的な文学者がミステリーあるいは探偵小説を発表していたことに注目し、個別の作家・作品を新たな視点で捉え直すことで、標準的な文学史の図式的な枠組みに再考を迫り、新しい地平を示すことに成功している。

本論文では、近年のプロレタリア文学研究や探偵小説研究の知見が参照されつつ、六つの章を通じて、少なからぬプロレタリア文学者が探偵小説に接近していたこと、文学史上有名な作家が『新青年』のような都会派娯楽雑誌に探偵小説を書いていたこと、現在では知られていないが当時は高く評価されていた作家・作品など、見過ごされてきた観点が次々に提出されている。そうすることで、プロレタリア文学と、探偵小説に代表される大衆文化との接点を追究し、一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけての出版界の豊穡かつ混沌とした状況を浮き彫りにした。その過程で、個別作品における国内外の作品の摂取や前近代以降のセクシュアリティの変遷も明らかになるなど、狭い意味での日本近代文学研究を超える意義を持っている点も、本論の特長である。さらに、これらの考察が膨大な資料の発掘と読み込みに支えられている点も特筆される。

なるほど、本論の問題意識と重なるものの論じられていない作家（たとえば平林たい子）もいることや、今回主に取りあげられた時代とその前後の時代との関係に考察の余地があること、表現上のいささか言葉足らずに思われる点など、克服すべき課題もなかったわけではない。

とはいえ、以上のような課題は、本論文を今後より発展させる可能性を示すものでもある。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。